

第70回を迎える「全国農村読書調査」

一般社団法人 家の光協会

協同・文化振興本部 読書・食農教育部

文化委員 板野 光雄

1. はじめに

家の光協会が、戦後の農村文化の実態を把握するために、内閣の指導と協力を得て「農村の読書に関する調査」を実施したのは終戦翌年の1946年のことである。

第5回から「全国農村読書調査」と調査名を変更したが、毎年、調査を継続実施し、今年で第70回という節目の年を迎える。

また、1947年には毎日新聞社が「出版に関する調査」（のちの「読書世論調査」）を実施した。わが国の双璧ともいえる「全国的な読書調査」は、ほぼ同時期にスタートしたのである。

本稿では、「全国農村読書調査」の歴史を振り返りながら、現在の農村における読書実態を報告していく。

2. 「家の光協会」とは？

「全国農村読書調査」について触れる前に、そもそも実施主体である「家の光協会」のことを説明しておく必要があるだろう。

農村向け家庭雑誌『家の光』は、大正14年に産業組合中央会（農業協同組合の前身である産業組合の全国組織）から刊行され、今年5月号で創刊90周年を迎えた。

一般書店では販売していないため、宗教関係の出版物と誤解されることもあるが、その事実はない。（念のため！）

家の光協会には3つの顔がある。

1つ目は、出版団体としての顔。現在、

月刊誌の『家の光』『地上』『ちゃぐりん』『やさい畑』および「家の光図書」（書籍）を発行している。

2つ目は、JA（農業協同組合）グループの一員としての顔。JAは多様な業務に従事しているが、そのなかで出版・教育・文化・広報などの機能を担っているのが、家の光協会である。

3つ目は、公益法人としての顔。2013年に公益法人の監督基準の見直しによって、「一般社団法人」となったが、とくに読書運動の推進を中心に公益的な文化活動に力を入れている。具体的には「読書ボランティア養成講座」「読書サポーター研修会」の開催、「家の光読書エッセイ」の募集・顕彰などがあるが、「全国農村読書調査」はこれらの基礎・根幹をなすものである。

3. 「全国農村読書調査」の開始

終戦後、日本では近代的技法による調査が急速に発展していく。その端緒となったのが、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）である。GHQは、日本民主化政策の一環として、世論調査の実施を日本政府に勧告した。これを受けて政府は1945年11月に内閣情報局内に世論調査課を設置し、家の光協会の調査事業は内閣情報局の全面的な協力を受けることになる。

また、家の光協会が終戦直後に調査事業を開始した背景には、農村の情報源として

の重要な役割を担っていた事情もある。

戦時中に農林省が実施した「農業知識取得状況の調査」(6,868人対象)によると、農業知識の情報源は、1位＝「地方新聞」(40%)、2位＝『家の光』(31%)、3位＝「ラジオ」(25%)であった。

家の光協会が社団法人として独立したのは1944年のこと。設立して間もない家の光協会の調査事業に政府が全面的に協力したのは、農村における協会の役割を政府が認めていたからにほかならない。ちなみに、戦時下の内閣情報局は出版の生殺与奪権を握るほどの権力を有していた。

また、終戦直後は世論調査が続々と登場した時代でもある。前述したように、毎日新聞社は戦後の世論調査の牽引役を果たしてきたが、1945年9月には政府に先駆けて調査室を開設している。その後、11月には共同通信社と朝日新聞社が、1946年3月には時事通信社が、6月にはNHKが世論調査部署を開設している。(松本正生『「世論調査」のゆくえ』2003年、中央公論社)

「読書運動の推進」を事業目的の柱とする家の光協会もまた、こうした時代状況のなかで「全国農村読書調査」をスタートさせたのである。

4. 調査方法の変遷

1950年、当時の竹橋(東京都千代田区)の事務所が全焼し、初期の貴重な報告書を焼失した。また、1959年までの資料のなかにも紛失したものがあるため、完全な調査データは1960年以降のものしかないことをお断りしておく。

「全国農村読書調査」の特徴は、調査内容の継続性にある。調査地点数(抽出方法)、対象者数(抽出法)、調査方法、調査員など「調査の概要」は時代の変遷によって変化

してきたが、骨格となる「主な調査項目」は継続性を重視して大きく変えていない。

ここでは、まず前回の「第69回全国農村読書調査」の概要をご覧ください。

<調査の概要>

〔1〕調査の目的

「農林業地域」の読書に関する状況を調査し、その結果を広く活用してもらうため。

〔2〕主な調査項目

- (1) 月刊誌、週刊誌、書籍の読書状況
- (2) 月刊誌、週刊誌、書籍の読書目的・理由
- (3) 書籍を読まなかった理由
- (4) 月刊誌の読書時間
- (5) 家族の月刊誌の定期購読状況
- (6) 月刊誌、週刊誌、書籍の購入先または借覧先と入手法
- (7) 月刊誌、週刊誌、書籍の購入金額
- (8) 好きな作家・著者
- (9) 世帯の新聞の定期購読状況
- (10) マスコミ接触時間
- (11) インターネットを利用した電子書籍や電子雑誌の読書状況と今後の読書意向

〔3〕調査対象

- (1) 母集団 全国16歳以上79歳以下の男女
- (2) 標本数 1,200(全国60地点)
- (3) 抽出方法 層化2段無作為抽出法

※2011年度(第66回)と2012年度(第67回)は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響を考慮し、岩手県、宮城県、福島県の3県は予め調査地点から外したが、前年の2013年度(第68回)から3県を調査地点として復活させた。

〔4〕調査時期

2014(平成26)年7月10日～7月27日

〔5〕調査方法

調査員による訪問留置・訪問回収法

〔6〕調査実施委託機関

一般社団法人 新情報センター

〔7〕回収結果

- (1) 有効回収数(率) 867人(72.3%)
…………(前年比+1.7%)
- (2) 調査不能数(率) 333人(27.8%)
(内訳) 転居 59、長期不在 24、一時不在 41、住所不明 8、拒否 189、その他(病気など) 12

有効回収数(率)の推移<標本数は、1,200人>

	有効回収数	有効回収率
2007年	892人	74.3%
2008年	865人	72.1%
2009年	884人	73.7%
2010年	905人	75.4%
2011年	879人	73.3%
2012年	882人	73.5%
2013年	847人	70.6%
2014年	867人	72.3%

(注) 本調査では、月刊誌、週刊誌、書籍を次のとおり定義した。

月刊誌＝月1回刊、隔週刊、月2回刊、隔月刊、旬刊、季刊などの定期刊行物

週刊誌＝週1回発行の定期刊行物

書籍＝文庫本、新書本、全集などコミックスを含む単行本や文庫本で、年鑑、年報、教科書、学習参考書、辞・事典は含まない

○調査地点、調査対象者の抽出方法

実施当初は、調査地点は調査員の出身地であったり、調査対象者も世帯員会員であったりと、「無作為抽出」という概念がまだ

定着していなかった。

調査地点をブロック分けして無作為抽出するようになったのが1951年から。また、調査対象者を「居住者名簿」(のちの世帯台帳・住民基本台帳)に基づいて無作為抽出するようになったのは1950年からである。

○調査方法

主な調査方法としては、郵送法・留置法・面接法・電話法などがある。

「全国農村読書調査」では、1947年からは面接法を採用。その後、1984年からは面接法に加えて一部留置法をとってきた。さらに、1993年からは留置法を基本に一部面接法に変更し、2006年からは留置法(調査員による訪問留置・訪問回収法)のみとした。

○調査員

戦後間もなく、家の光協会は全国に200名ほどの「家の光文化調査員」を委嘱し、各種農村調査の足がかりとしたが、実際に調査員となったのは学生と協会職員だった。学生については、農協系教育機関、農業者大学校、大学の農学部などから協力を得てきた。学生に調査員を委嘱するにあたっては、学生の農村体験の場としてゼミの一環と位置づけてくれる学校も多かった。

○調査実施の委託

家の光協会では、2006年から(社)新情報センターに調査実施を一部委託している。

最大の背景は、2003年「個人情報保護に関する法律」の制定である。この法律が施行される前から、農協の組合員名簿や市町村の住民基本台帳の閲覧を拒否したり、閲覧できないような仕組みをつくったりするところが増えてきた。

個人情報保護法では、調査実施にあつ

て細かいガイドラインが定められている。さらに、いわゆる「過剰反応」による調査拒否・閲覧拒否は急速に広がった。

「このままでは全国農村読書調査は中止するしかない!」。そんな危機感のなか、個人情報保護法制定の3年後、調査専門機関である(社)新情報センターへ調査実施を委託することを決定したのである。

その後、調査方法が留置法に変わると、回収率は75%前後に急落する。留置法だと調査員が相手に対面しなくても調査できるため、回答する側も、回収する側も意欲が減退するのであろう。さらに、個人情報保護法が、こうした傾向に拍車をかけた。

このことも調査専門機関に委託した理由の一つである。

○回収率の推移

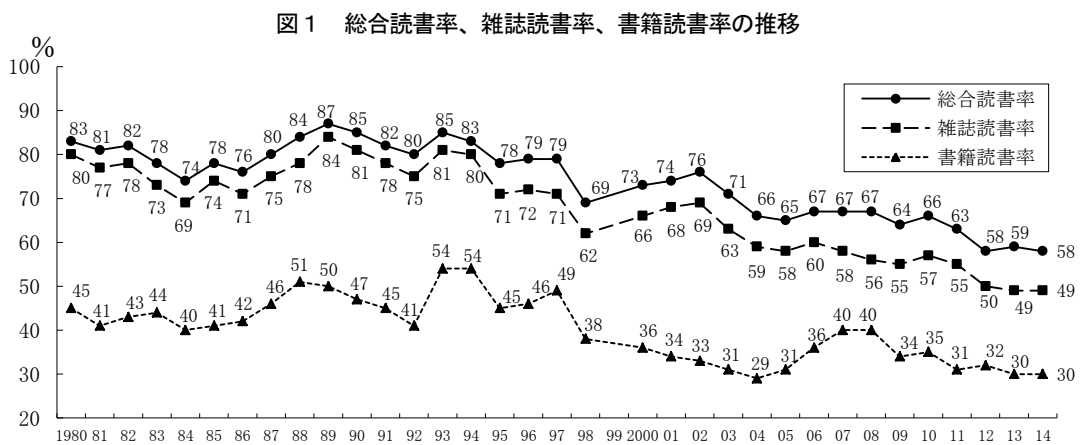
1960年(第15回)以降の回収率の推移をみると、興味深い事実が浮かび上がってくる。1992年(第47回)まではおおむね85%以上という高い回収率を示している。(1985年には、なんと98%を記録!)この期間は面接法中心で調査を実施していたことが、最大の要因である。農村でも勤めに出る人が多くなっていたが、そういう場合、調査員は朝早く、夕方、あるいは夜遅くに訪問して面接調査する。回収率の高さは、そうした努力の賜物であった。

5. 農村における読書率の推移

「全国農村読書調査」が一貫して重視しているのが、農村における「読書率」の推移である。「読書率」には次の3つがある。

- ①「総合読書率」は雑誌(月刊誌・週刊誌)、書籍のいずれかを読んでいる人の割合。
- ②「雑誌読書率」は月刊誌・週刊誌のいずれかを読んでいる人の割合。
- ③「書籍読書率」は半年間に書籍を読んだ人の割合である。

ここで図1をご覧ください。



1980年から2014年までの「総合読書率」「雑誌読書率」「書籍読書率」の推移を示したものである。

一見してわかるように、3つの「読書率」は、いずれも減少傾向にある。

「総合読書率」のピークは1989年の87%だが、昨年は58%まで落ち込んだ。「雑誌読書率」も1989年の84%から昨年は49%に低下。「書籍読書率」も1993・1994年の54%から昨年は30%に落ち込んだ。

この数字を裏返してみると、現在の農村における実態が浮き彫りになってくる。

つまり、①雑誌や書籍を1冊も読んでいない人が42%、②雑誌を1冊も読んでいない人が51%、③書籍を半年間に1冊も読んでいない人が70%ということになる。

これが現状であり、出版に携わる人間の一人として「背筋の寒い」思いがする。

6. 好きな作家・著者

本調査では、自由回答・複数回答による「好きな作家・著者」を尋ねている。

昨年の調査では、1位が6年連続で東野圭吾、2位は五木寛之、西村京太郎、赤川

次郎の3人が並び、5位は有川浩、6位が松本清張、7位が宮部みゆき、8位が山崎豊子、村上春樹、池井戸潤の3人だった。

歴代1位の変遷を大まかにみると、1960年までは吉川英治、1968年までは石坂洋次郎、1984年までは松本清張、1999年までは赤川次郎であった。2000年以降は入れ替わりが激しく、最近の特徴としては推理小説作家が1位になる傾向がある。

(参考までに、過去16年間の「好きな作家・著者」のベストテンを表1に掲載する)

まだまだ、紹介したい調査結果はあるが、誌面に限りがあるのでここで止めておく。

表1 好きな作家・著者

2014年		2013年		2012年		2011年	
1	東野圭吾	1	東野圭吾	1	東野圭吾	1	東野圭吾
2	五木寛之	2	赤川次郎	2	赤川次郎	2	赤川次郎
2	西村京太郎	3	赤川次郎	3	宮部みゆき	3	宮部みゆき
2	赤川次郎	4	内田康夫	4	司馬遼太郎	4	西村京太郎
5	有川浩	5	西村京太郎	5	西村京太郎	5	池波正太郎
6	松本清張	6	浅田春樹	6	五木寛之	6	瀬戸内寂聴
7	宮部みゆき	7	村上春樹	7	松本清張	7	吉野綾子
8	山崎豊子	8	伊坂幸太郎	7	瀬戸内寂聴	6	内田康夫
8	村上春樹	9	佐伯泰英	7	宮野綾子	9	五木寛之
8	池井戸潤	9	松本清張	7	池波正太郎	9	司馬遼太郎
		9	藤沢周平	7	渡辺淳一		
2010年		2009年		2008年		2007年	
1	東野圭吾	1	東野圭吾	1	宮部みゆき	1	西村京太郎
2	赤川次郎	2	西村京太郎	2	赤川次郎	2	赤川次郎
3	司馬遼太郎	3	宮部みゆき	3	宮部みゆき	3	司馬遼太郎
4	宮部みゆき	4	司馬遼太郎	4	東野圭吾	4	松本清張
5	五木寛之	4	松本清張	4	西村京太郎	5	東野圭吾
5	村上春樹	6	渡辺淳一	6	松本清張	5	森村誠一
5	藤沢周平	7	赤川次郎	6	司馬遼太郎	5	内田康夫
8	西村京太郎	8	新田次郎	6	夏目漱石	8	瀬戸内寂聴
9	松本清張	8	藤沢周平	9	五木寛之	8	渡辺淳一
10	渡辺淳一	10	村上春樹	10	渡辺淳一	8	夏目漱石
10	尾田栄一郎	10	池波正太郎	10	村上春樹	8	藤沢周平
10	林真理子			10	瀬戸内寂聴	8	シドニー・シェルダン
						8	五木寛之
2006年		2005年		2004年		2003年	
1	西村京太郎	1	松本清張	1	西村京太郎	1	赤川次郎
2	赤川次郎	2	赤川次郎	2	赤川次郎	2	西村京太郎
3	司馬遼太郎	3	内田康夫	3	宮部みゆき	3	宮部みゆき
4	宮部みゆき	4	司馬遼太郎	4	瀬戸内寂聴	4	五木寛之
5	松本清張	4	西村京太郎	5	渡辺淳一	5	内田康夫
5	内田康夫	4	平岩弓枝	6	五木寛之	6	松本清張
7	山村美沙	7	宮部みゆき	6	司馬遼太郎	6	林真理子
7	よしもとばなな	7	五木寛之	6	藤沢周平	8	瀬戸内寂聴
9	林真理子	9	宮尾登美子	9	よしもとばなな	9	司馬遼太郎
10	宮尾登美子	9	池波正太郎	9	松本清張	9	渡辺淳一
10	森村誠一			9	内田康夫		
10	池波正太郎						
10	平岩弓枝						
2002年		2001年		2000年		1999年	
1	赤川次郎	1	赤川次郎	1	司馬遼太郎	1	赤川次郎
2	五木寛之	2	西村京太郎	2	赤川次郎	2	西村京太郎
3	司馬遼太郎	3	内田康夫	3	宮部みゆき	3	司馬遼太郎
3	西村京太郎	4	司馬遼太郎	4	西村京太郎	4	松本清張
5	宮部みゆき	5	渡辺淳一	5	内田康夫	5	池波正太郎
6	渡辺淳一	6	松本清張	6	五木寛之	5	渡辺淳一
7	宮尾登美子	7	五木寛之	6	宮部みゆき	7	さくらももこ
7	瀬戸内寂聴	7	瀬戸内寂聴	8	瀬戸内寂聴	7	吉村美沙
9	宮本清張	7	藤沢周平	9	吉川英治	7	山村美沙
9	松本清張	7	山村美沙	10	相田みつを	7	内田康夫
9	内田康夫			10	池波正太郎		
9	平岩弓枝			10	田辺聖子		
				10	夏目漱石		
				10	平岩弓枝		
				10	三浦綾子		
				10	吉本ばなな		
				10	渡辺淳一		

読書の子どもたちの人間性を育み、若者の「深く考える力」を醸成し、人々の心を豊かにし、高齢者の脳細胞を活性化する。

読書の盛んな農村、文化の香り高い地域を、ぜひとも復活させたいものである。

そのためにも、家の光協会は「全国農村読書調査」を可能なかぎり継続し、農村における読書運動の推進に力を注いでいきたいと、決意を新たにしている。

※2000～2014年の「全国農村読書調査」の結果報告書は、家の光協会のホームページにも掲載している。併せてご覧いただければ幸いである。

<http://www.ienohikari.net/bunka/research.html>

筆者プロフィール

板野 光雄 (いたの みつお)

一般社団法人 家の光協会 協同・文化振興本部 読書・食農教育部 文化委員。

昭和51年、入会。家の光編集部副編集長、中国四国普及局長、協同・文化振興本部長などを経て、平成21年～現職。

